

幻の巨大な都

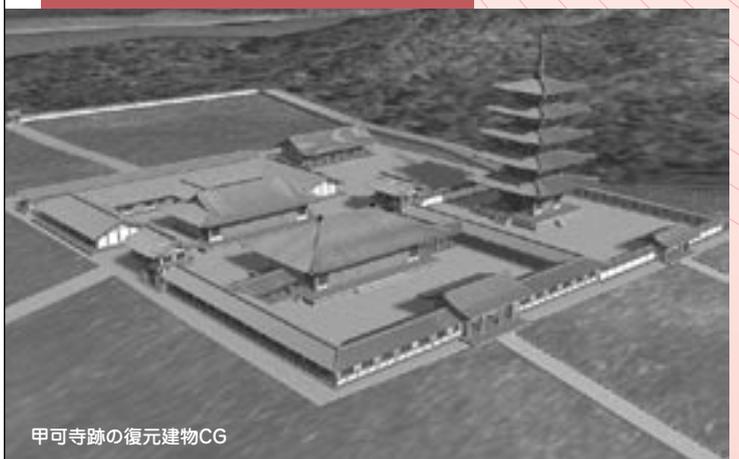
紫香樂宮跡は今から1250年前に聖武天皇によって甲賀市信楽町に造宮された都です。

天平15年(743)に、奈良の東大寺に先駆けて、「大仏建立」の詔が出され、天平17年(745)には新京と称され、実質的に首都としての位置付けがされました。

しかし、急激な遷都は、人々の不安を募らせたのでしようか、5月には奈良の平城宮に再び都は戻され、わずか3年余で記録から姿を消し、廃都になったとされてきました。

そのため、その所在についても長い年月の中で人々の記憶から忘れられ、短命の仮設の都市として幻の都になっていました。

合併前の信楽町では、その所在地を確認するため、発掘調査を実施し、20年におよぶ調査で誰もが予想しえなかったほど大規模な遺跡であることが最近になってわかってきました。特に平成12年以降、宮町遺跡の発掘調査で、巨大な建築物が次々と見つかり、紫香樂宮の宮殿が信楽町宮町にあったことが判明したことから、宮町地区の皆さんの協力により、宮町遺跡で主要遺構が出土した範囲19.3haが今月末に国史跡紫香樂宮跡として追加指定されることになりました。今回はこれらの新しい調査成果を紹介します。



甲可寺跡の復元建物CG

大仏発願の地

甲可寺

国史跡紫香樂宮跡

「史跡紫香樂宮跡」は信楽町黄瀬・牧の丘陵にあり、この場所で多くの礎石が残っていることや古瓦が出土することが江戸時代から知られていました。

そして、この場所が「内裏野」と呼ばれていたことから大正15年(1926)に「史跡紫香樂宮跡」として史跡に指定さ

れました。

しかし、昭和5年(1930)に初めて発掘調査が行われ、礎石位置から東大寺によく似た建物配置であったことがわかり、出土瓦も山城国分寺跡(京都府加茂町)のものと同じものであることが判明しました。

さらに史跡指定の理由になった「内裏野」という地名が、延宝5年(1677)以前は「寺野」・「寺野惣山」と呼ばれていたことが明らかになり、この場所の遺跡が寺院跡なのは間違いないようです。

現在研究者の間でも、聖武天皇が大

仏を建立しようとした「甲可寺」とする意見や紫香樂宮以降に『正倉院文書』等の史料に記されている「甲可宮国分寺」とする説があります。

また、最新の測量調査で、金堂と講堂の方位が微妙に異なることがわかったことから建設期間が長期であったと考え、未完成の「甲可寺」に手を加え「国分寺」に造り替えたとする説などが出されています。

現在、滋賀県教育委員会がこの場所で本格的な発掘調査を行なっているので、今後の調査に期待が寄せられています。